

審査の結果の要旨

氏名 小山 義徳

本論文は、英語リスニング能力と、入力された英語を語順通りに処理する「継時処理スキル」との関係を基礎研究と訓練研究の2つの側面から検討したものである。

第Ⅰ部では、これまでの英語リスニング研究を概観し、先行研究が音声要因を偏重し、聴取した音声からメッセージの意味の理解に至る情報処理過程に着目した研究が少なかったことを指摘している。そして、リスニングにおいては、提示が聴覚的か視覚的かに関わらず、入力情報を継時的に処理する能力に注目する必要があることを主張している。

第Ⅱ部の基礎研究では、5つの研究を通じて、継時処理スキルがリスニングスコアの大きな規定要因であることを示した。研究1では、読み戻りができないよう文を単語ごとにスライドによって継時提示するシステムを作成し、リスニングスコアの上位群が下位群よりも継時提示条件下での理解度が高いことを示した。この結果は、リーディングスパンテストで測定したワーキングメモリ容量を統制した研究2でも確認された。両群の違いは、関係代名詞結部のように複雑な認知処理を要する箇所でも顕著に表れることが、自己ペースで継時提示する場合の時間間隔データ（研究3）や、同時提示した場合の眼球運動計測（研究4）によって明らかとなった。語彙力や文法力のテスト得点を統制しても、リスニングスコア下位群では英文の読み戻り数が多いことが研究5で明らかにされた。

第Ⅲ部では4つの訓練研究を行っている。研究6では、予備実験で継時提示のスライドを用いた訓練によりリスニングスコアが伸びることを確認した上で、本実験ではより教育現場で実施しやすい方法として英文速読訓練によって継時処理を促した。その結果、一般に行われているディクテーション訓練よりも、リスニングスコアの伸長に効果が見られた。研究7では、速読訓練群の読みの速さを実測し、視覚的な継時処理が聴覚情報の処理に移した結果であることの傍証を得ている。さらに研究8では、速読訓練前後の読み戻り数を比較し、読み戻りの減少した学習者はリスニングスコアが伸びるという傾向があることを示した。ただし、あまり訓練効果のない学習者もいたため、他の要因も関与していることが推察された。研究9では、ある程度英語の音声聞き取れる学習者でないと、速読訓練がリスニング力を伸ばす効果は得られないという結果を得ている。

第Ⅳ部では本研究の意義を、リスニングの情報処理の仕組みを検討した基礎研究としての側面からと、教育現場への貢献という訓練研究としての側面から総合的に考察している。

このように、本論文は英語リスニングにおける継時処理スキルに着目し、基礎研究と訓練研究を組み合わせる詳細な実験的検討を行い、理論と実践の両面から見て有意義な知見を得ている。よって、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい論文であると評価された。